



# 商店街の出現と発達 大阪市の千林商店街を事例として

## Rise and Growth of Shopping Districts

石村真一

はじめに

①商店街の萌芽期

②京阪電鉄及び市電の開通、都市計画と商店街の形成

③第二次大戦前における千林商店街

④第二次大戦後の復興と商店街の発達

⑤現在の千林商店街と今後の展望

まとめ

【論文要旨】

大阪市の中心地域では、明治期以前より商店が集中する商業地域が形成されている。しかしながら、明治後期から大阪市の市域拡張によって新たに市域となった地域では、商店街の形成はほとんどが明治期以降である。

本論では、大阪市を代表する商店街の中で、とりわけ発達時期が遅いとされる旭区の千林商店街を事例に挙げ、画像資料を基礎として発達過程と地域社会のかかわりについて考察した。その結果次のような内容が明らかになった。

千林商店街は現在約220の店舗で構成されている。ところが明治末期には、千林商店街の中心となっている東成郡の千林村と隣接する二つの村を併せて、10軒程度の商店があったにすぎない。商店街に発達する契機となったのは、明治末期の私鉄の開通とともに停車所の設置、大正後期における公設市場の開設である。さらに大正末期に東成郡が大阪市に編入され、昭和初期に市電の開通とともに停車所の設置、国道1号線の開通、土地改良整備と城北運河の開通による人口の増加によって、千林商店街の基礎が構築された。

千林商店街が大阪市において有数の商店街となったのは、昭和20年代後半であり、戦災に遭わなかつたことも深く関与している。千林商店街は昭和30年代後半に最も繁栄した。昭和30年代後半からは大型スーパーとの競合が商店街の中で始まり、千林商店街としては商店街の中に開店した大型スーパーと共に存するという方法を模索していく。

旭区の人口は昭和30年代をピークとし、その後は減少が続き、現在は昭和20年代半ばの人口と同じ状況となっている。